

# 聞名仏教

第91号  
(発行日)

2018年4月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)  
63-4488

(発行人) 土井紀明  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp  
http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉  
毎月22日 午後2時始。  
○ 〈念仏座談会〉  
毎月2日と12日 午後3時始  
○ 〈聖典学習会〉  
毎月6日 午後7時始。  
○ 〈真宗入門講座〉  
毎月18日 午後6時30分始。  
\* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

## 仏の存在と信心

時々「仏(アミダ仏)とか、あるいは極楽とか、そういうものが本当にあるのでしょうか」と問われます。一般的に云えば「神仏はほんとうにいるのだろうか」という質問です。

こういう質問に関してですが、真宗大谷派の先覚者清沢満之師は「私たちは神仏が存在するから神仏を信じるのではない。私たちが神仏を信じるから、私たちが神仏が存在するのです。また地獄極楽があるから、地獄極楽を信じるのではない。私たちが地獄極楽を信じる時、地獄極楽は私たちに對して存在するのである」と言っています。要するに「実なるが故に信ずるにあらざ、信ずるが故に実なり」と言われるのです。

ではここで清沢満之師はどのようなことを言おうされているかと言えば、アミダ仏も極楽浄土もそれを感知する心(信心)が無い場合には、仏や浄土がましましても、その人に

とっては仏も浄土も無いのと  
同じであるといわれるのです。

清沢師はそれを、たとえば「熱い冷たいは客観的にあるのではなく、熱い冷たいを感じる意識があつてはじめて熱い冷たいはあるのであつて、感じる心の無いものには熱い冷たいはないようなものだ」と言っています。目の前に石があります。石には冷暖を感じずる心がありませんから、石には熱い冷たいはないでしょう。

一方、私たちがそれを知ろうが知るまいが、気づこうが気づくまいが、その働きはその人の上に働いているものもあります。ことに物質的な働きにいえませぬ。

たとえば、地球の重力はニュートンが発見してもしなくても働いています。ニュートンが万有引力の法則を発見してもしなくても、リングは木から地面に落ちるのです。私たちがたとえ知らなくても地球の引力によって私たちの身体は地球の上に置かれてきた

のです。

こうしたことから言えることは、アミダ仏の働きはそれを感知する心が無ければアミダ仏の働きはその人に無いのと同じでしょう。あるいはこう言ってもいいと思います。アミダ仏の働きはそれを信じる心(信心)がないとアミダ仏はその人に活性化してこない。

音楽などもそうですね。今朝もスマホでバッハの「パルティータ第2番」をピアノの演奏で聴きました。美しさに圧倒されます。でももし美しいと感じる心がなければバッハの音楽はあつたとしても無いのと同じです。音楽を美しいと感じる心において音楽はその人に活性化し、実在しませんが机やイスにはそういう心には音楽は無きも同然でありましょう。

宗教的な事実はそれを信じる心において初めてリアルな事実であり、その人の上に生きて働くのでありましょう。

このことを更に展開していきますと、浄土に生まれても浄土は顕現しないということでしょう。古来、真宗で浄土に生まれることと覚りの智慧を成就する(仏になる)ことが一つに説かれています。このことなのでしょう。覚りとは真実を覚知する心です。覚知する智慧において浄土は顕現するのでしょうか。

真実の覚りを成就する因が、真実の信心といわれますから、信心が無ければたとえ浄土に生まれても浄土は知られないままではないのでしょうか。

ですから信心が無いのに、「仏がましますかどうかをよ

### 《念佛寺永代経法要》

四月二十二日(日)

午後二時始

法話 西川和榮先生

\*同日(四月二十二日)午前十時・勤行法話

(念佛寺住職の法話です)

# 信心歡喜慶所聞

(和讃問答)

く調べて、仏ましますと知れたら信じよう」といくら外に探求しても、仏は確認できないでしょう。仏がましますと分かってから信じようとするといつまでたつても分からないままです。

ではどうしたら良いかと言え、仏を信じた人の言葉を聞いて、ともかくも「自分には仏は確認できなくても、この人の言うことは間違いない。この人の言うことをまず信じてみよう」と一歩踏み出してみることで。

では「仏を本当に信じた人」は誰なのか、という現実の問題があります。ここがまた大切な点です。

中にはとんでもない「尊師」なる人に引つかかって自分の人生を台無しにしてしまうこともあります。

私たちは幸いに開祖の釈尊がおられ、釈尊のお言葉に信順されて救われた親鸞聖人がましますので、親鸞聖人のお言葉に信頼することができま

す。そうすると親鸞聖人のお言葉を直接に学ぶなり、あるいは聖人の教えを正確に伝えて下さるお方のお話を信頼して

聞いていけば良いのです。

それでもなお、説いて下さるお方が正確に親鸞聖人のお言葉を伝えていくかが分からない場合は、まずお念仏を申して、お念仏を申しつつ、お話を聞く。そうするとお念仏にぴつたり合うお話なら、南無阿弥陀仏の有り難さを感じてお話を喜ぶようになり、おのずと親鸞聖人の教えにかなうようになるのではないでしょう

ようか。なぜならお念仏は「浄土真実の行」であり「ただ念仏のみぞまこと」ですから、お念仏の真実は真実に応じたお話を引き寄せて下さいます。

ともかくも信心において私たちは生きたアミダ仏とであることができるのです。ですから信心は大切です。

そして今回は詳しく申せませんでしたが、そのような信心が私の上に起るのは自らの力でも無ければ、信心はまた自らの心が生み出すものではありません。アミダ仏の大悲のお心が私たちに届いてはじめて信心が私の上に発るの

(了)

## 信心歡喜慶所聞

乃暨一念至心者

南無不可思議光仏

頭面に礼したてまつれ

(浄土和讃)

現代語訳(誓いの御名を聞き、信心歡喜して、ああ有難いとせめて一念でも喜ぶ人は、助けたもう南無不可思議光であるアミダ仏に頭面を御足につけて礼したてまつれ。)

\* \*

D 「信心歡喜慶所聞」とは信心歡喜して聞くところを慶ぶという意味です」

N 「何を聞くのを慶ぶのですか」

D 「それは無量寿経の下巻に〈聞其名号 信心歡喜〉と説かれていくように、名号を聞くところの慶びです」

N 「名号とは」

D 「本願の名号です」

N 「本願とは」

D 「念仏往生の願です」

N 「念仏往生の願とは」

D 「アミダ仏の誓いであって、

私たちに〈念仏申すばかりで

浄土に往生せしめる〉との誓い。ですから本願の名号を聞くとは、念仏往生の誓いを南無阿弥陀仏の名号において聞くことです」

N 「どこでその名号を聞くことができますか」

D 「今、お念仏してごらん下さい」

N 「ナムアミダブツ、ナムアミダブツ」

D 「ほら自分で称えたナムアミダブツが耳にナムアミダブツと聞こえるでしょう」

N 「ええ」

D 「その名号を聞くのです」

N 「これが本願の名号なのですね」

D 「ええ、今耳にナムアミダブツと聞こえるでしょう。その名号において誓いを聞くのです」

N 「耳にナムアミダブツの音が聞こえますが」

D 「単にナムアミダブツの音を聞くのではなく、ナムアミダブツの音声において、念

仏往生の誓いすなわち〈念仏

申すばかりでタスケル〉と聞くのです」

N 「ナムアミダブツと称えている声を聞くとともに〈念仏申すばかりでタスケル〉と聞くのですね」

D 「ええ、称えている私に〈称えるばかりで助ける〉というアミダ仏の誓いを聞くことは、〈ああ、このままなりで助けて下さる〉と聞くのです」

N 「ナムアミダブツと聞くと、アミダ仏が〈そのままなりでタスケル〉とお聞かせ下さっていることなのですね」

D 「ええそうです。これはアミダ仏の驚くべき大悲なのです」

N 「なぜですか」

D 「現在の私はこのままでは助からぬ者であり、どうにもならぬものであり、煩惱熾盛の凡夫であり、死の闇に入り込んでいく身であり、流転するしかない者であるからです」

N 「なかなかそうは思えませんが」

D 「凡夫の私たちは自分の姿、自分の状況が如何なる状態であるか分かっていません。そんな私を罪悪深重にして流れ転がっている者であり、そこから出られない生死の凡夫であると、徹見して下さっているのがアミダ仏です。そのよ

# 信心夜話

だけです。

アマダ仏の光は具体的にお念仏となつて、私たちの口に称えられ耳に聞かされて、真つ暗に閉じられた心の部屋を、外からナムアマダブツ・ナムアマダブツとたたき続け、喚び続けて下さっています。

その南無阿弥陀仏の喚び声に喚びさまされて、遂に小さいながらも扉が開いてアマダ仏の光が入って下さり、アマダ仏との生きた出あいが始まるのであります。

(了)

## 〈遠方法話予定〉

- 四月七日。福井別院。2組推進員研修会。十時より十二時半。法話・座談。
  - 五月三日。福井別院。2組推進員研修会。十時より十二時半。法話・座談。
  - 五月九日。名古屋市。高畑開法会館。十時より十二時半。法話・座談。
  - 六月十三日(午後)から十五日(午後)。福井別院。法話・座談。
  - 七月二十七日。名古屋市。高畑開法会館。十時より十二時半。法話・座談。
  - 七月三十一日。福井別院。二組の晩天講座(午前六時)。午前十時より座談。
- \*詳しくは念佛寺にお尋ね下さい。

ということ、思うことも言うことも出来ないほどの不思議で有難いことです。そういう不思議な救いのお徳をもちたまえるアマダ仏ゆえ、ここでは南無不可思議光仏とたたえられているのです」

N 「なぜ南無がついているのですか」

D 「南無とは帰命と言う意味で、帰命せよとの不可思議光仏だからです」

N 「帰命せよとは」

D 「まるまるタスケルからまかせてくれよ(帰せよ)と仰せ(命)下さることです」

N 「頭面に礼したてまつれ」とは」

D 「額をアマダ仏の御足につけるほどに敬い尊ぶられるべき御恩のあるアマダ仏であるから、敬い礼したてまつれ、との仰せです。体を屈し額を仏の御足につけての礼拝は、今でも中国とか南方の敬虔な仏教徒はそういう礼拝をしていますね」

N 「頭面に礼したてまつれ、とお勧め下さるのはそう敬わずにはおれない不可思議光仏ではないかとお心なのでしようね」

D 「ええそう思います」(了)

このひと思いというのは、表現するのは難しいのですが、普通のいわゆる考えるとか思いついてかいうものとは違って、身の髓に浸むというようなひと思いです」

N 「〈至心者〉とは」

D 「信心者という意味です。至心とはアマダ仏の真心の心のことで、至心を頂いた人即ち信心の人のことです。ああ有難いという一念の信心は自らの力で起こつたのではなく、アマダ仏の大悲の真心が悪業の凡夫の心に不思議にも届いて信心となつて私の心に発起せしめられたのです。その人をここでは〈一念至心者〉と言われるのです。一念の真心信心(至心)を賜った人のことです」

N 「〈南無不可思議光仏〉とは」

D 「南無阿弥陀仏のことです。ここでは南無阿弥陀仏のお徳の不可思議なることを讃えて南無不可思議光仏と言われるのです」

N 「なぜ不可思議なのですか」

D 「凡夫が長々と修行して段々と佛になつていくのなら、さほど不思議ではありませんが、凡夫が凡夫のまま掌を返すように本願を信じる一念の信心で仏になることが定まる

うな私を大悲したまい、哀れんで下さつて救い主となつて今ここに喚びかけて下さつていのが南無阿弥陀仏です」

N 「そうすると、ナムアマダブツと聞くということは、助からぬ私と知り抜いて下さつて、そんな私を引き受けて下さり助けて下さる南無阿弥陀仏とお聞かせいただくことな

D 「ええそうですね。それですからその南無阿弥陀仏を聞くはずから慶ばざるを得ないので。ああ有難いと慶ぶ心が信心歓喜であります」

N 「では次に〈乃暨一念至心者〉とは」

D 「これは乃暨とは(いまし(一念に) およぶまで) ということで、弥陀の本願を聞いて(ああ有難い)とそのまま受け取るばかりで、アマダ仏の撰取不捨のお助けの利益にあずかり、浄土への往生が決定するので。その受け取るひと思いを一念といいます。それが一回だけでは無く生涯反復しますの乃暨(乃至)といつて一念以上を含む意味を表されているのです」

N 「一念とはひと思いなのですね」

D 「ええそうですね、こ

# お便り

## T・S氏からの便り

(T・Sさんの所感『木村無相師臨終法話注記』からの三月号よりの続きです。)

果遂の誓い

「定散自力の称名は果遂の誓いに帰してこそ教えざれども(他力)自然に真如の門に転入する」

ただ一回だけ「果遂の誓い」は働くだけのように思われるがそうではなく、一生果遂の誓願力はこの業煩惱の身に働き下さって千たび万たび「信後」に疑惑を起こしても「果遂の誓願力」のゆえに千たび万たびでも、真如の門にただ念仏定散自力の信の念仏の身に転落しても、果遂の誓いの誓願力は一生根気よくその果遂のお言葉通りにこの私を疑惑仏智を晴らしてくださいるのです。

ヒトタビ「ただ念仏の身に下された」ところに帰らされて下さるのであります。千たびでも万たびでも親に背き疑惑を信後に起こしてもお見捨てはないのであります。

(木村無相さんのお手紙より)

\*

☆私思う。よくぞ土井師が無相師に「信後に疑惑アリやナシヤ」と問うてくださったものであります。この問いがなければ無相師の大説法聞かれずじまいでありました。正に、唯円大徳が親鸞聖人に「歎異抄第9条」で問うたごとく、土井師が「無相上人」に問うて下されたのです。この問いかけがなければ、仏法万年の間、竜宮に沈み閉じたままでありました。無相師の説法、天にとどろき地を震わすです。

私は、今まで「歎異抄9条」の意味がわからなかった。私はこの無相師の言葉がなければ永遠に理解できなかつたでしょう。アアこのことであつたのかと。いろんな先生方の解説を読んでも何かしらしくりしなかつた。しかし無相師はなんと大胆におおらかに明快にお示しして下さい。我々は煩惱成就の人間である。これは死ぬまで煩惱成就させていたたくのである。これがわが姿の真相である。如是相である。

こんな私に、故に、だけに、懸けられた本願名号であつたのだ。親鸞いわく。

「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房同じ心にてありけりよくよく案じてみれば天に踊り地に踊るほどに喜ぶべきことを喜ばぬにて、いよいよ往生は一定と思ひ給うべきなり。喜ぶべき心をおさへて喜ばせざるは煩惱の所為なり。しかるに、佛かねて知ろしめして煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願かくのごときわれらがためなりけりと知られて、いよいよたのもしくおぼゆるなり」

信後であつても煩惱は沸く。信前であつても同等に煩惱は沸く。煩惱に変わりはない。死ぬまで沸くのが我が煩惱の真相である。真相である。煩惱が沸かなければ凡夫ではない。我らは死ぬまで煩惱を成就した身である。この身ゆえの弥陀の本願である。この身に煩惱がなくなれば弥陀の本願無用なり。悟つても悟らなくても煩惱は死ぬまで我が身と一心同体であります。この身に弥陀の本願が南無阿弥陀仏となり給いて迷いに迷い疑惑に疑惑を起してもますます離れ給わぬのであります。疑惑迷い心配いらず、これ我が本性の真相なり。地獄一定のす

わりに弥陀の本願がある。親鸞いわく。  
「踊躍歡喜の心もあり、いそぎ浄土へまいりたくそうらわんには、煩惱のなきやらんと、あやしくそうらひなまし」  
「これにつけてこ」  
そ、いよいよ大悲大願は頼もしく往生は決定と存じそうらへ」

自己の悪性が徹底されれば自覚されれば信心されれば、知らされれば照らされれば、弥陀の本願願心に自ずと頭が下がるのです。「本願のかたじけなさよ」と「常に御述懐さふらいしことを」であります。

我が煩惱と「本願のかたじけなさ」が離れぬに離れられない関係なのです。切つても切れない関係なのです。お前と俺とは同期の桜、地獄の底まで戦友なのです。信後であつてもこの原則は変わらないのです。信後に煩惱がなくなれば信心もなくなります。本願もなくなります。

信心は生きたこの煩惱にかつた生きた弥陀の本願願心大悲なのです。本願相応のわが機なのです。無信疑惑のわが機にかつた本願なのです。我に信心悟りというものがあれば弥陀の本願もなくなり救いもお助けもなくなります。

悪人正機、悪人正客といたたくのも「ただ念仏して」弥陀の願心に照らされるからです。我が機に宿業の自覚はありません。宿業の自覚ができない身と知らされたるが本願のお目当てなのです。ただ我身にはただ「本願のかたじけなさよ」があるばかりなのでしよう。

我が身に信心自覚というものがあれば仏法と真宗と永遠にお別れです。

一たび本願相応の願心念仏・本願相応の機と知らされれば、信後といえども千たびとも万たびとも、疑惑を起こしても自然に弥陀の本願願心念仏に帰らせていただけるのだとの心強いお教えです。20願の「果遂の誓い」のなさせる功德か十八願成就の功德のなせる業かはわかりませんが、本願の仰せには悪も恐れずです。本願を妨げる悪も疑惑もありません。

こんな素晴らしい言葉を吐ける人はないのでないでしょうか。法も機もただ弥陀の願心本願相応の世界の内なのです。正に無相師は還相の菩薩様であります。

(次号へ続く)

